

4月に孵化したヤママユの幼虫が、6月次々と緑の繭を作りました。ウスタビガも育てているのですが、こちらも可愛い緑のカマス型の繭を作りました。

ヤママユはクヌギの葉を2、3枚綴り合せて、その中に隠れるように楕円形の繭を作りましたが、ウスタビガは小枝に沿って糸を吐いて長い丈夫な柄を作り、ぶら下がる形の繭です。ヤママユの仲間でクヌギやコナラの葉を食べ、育つ時期も同じなのに繭の形が違うのはどうしてかな、と不思議です。

ヤママユは糸を吐き始めると、身体を勾玉のように曲げて自分の周りを繭の形に覆っていきます。はじめは糸層が薄いので幼虫が透けて見えますが、2日目になると中から糸を吐き続けて繭の壁を厚くしてもう外からは見えなくなります。そして3日目、シュウ酸カルシウム成分のおしっこをして、繭を固くしっかりさせて完成です。

ウスタビガの面白いのは、繭を閉ざさない事と、底に孔を開ける事です。繭の上は作っている間中開いていて、幼虫はそこから半身を乗り出して柄の補強をしたり、中にこもっていても、作業している幼虫の頭や糸を吐いている口などが覗けるのです。頑張っている幼虫の頭をちょっと撫でてみたくなったりするほどです。3日目に、開きっぱなしだった出入り口を中から閉じ合わせて完成です。繭の底には小さな丸い孔を開けます。水抜きのためと言われています。

繭を作る時期は、日本ではちょうど梅雨で

す。上部の出入り口を開けっ放しで繭作りをするので、雨が落ちて水浸しになったら大変です。



日本のウスタビガの繭



東チベットのウスタビガの幼虫と繭

そこで水が溜まらない様に水抜きの孔を開けるといって、素晴らしい発明をしたのです。

私は去年の抜け殻で実験してみました。蛹の殻もとって、空っぽの繭に水を入れてみると、すぐにポタポタと底の孔から水滴が滴り落ちはじめました。繭の中に水は残っていません。底の部分を切り取ってみると、孔の上にしつかりした小さな座布団状の繊維の塊があり、ルーペで見ると、その小さな塊の周りに10個前後の水抜き穴が作ってあり、

ちょうど蓮の孔の様なのです。入った水はその孔を通過して底の丸い孔に集まり、あっという間に外に排出されます。なんて機能的な排水施設でしょう。私はびっくりしてしまいました。

3年前中国の奥地東チベットを旅した時、高度3600mの稻城という地の河辺の林で、ウスタビガの幼虫と古い繭を見つけて嬉しかったのですが、繭の形は同じなのに、底の水抜き孔がないのです。ウスタビガは中国原産といわれていますが、ずっとずっと昔、日本に渡って来て梅雨を知ったウスタビガたちは、繭に水抜きの孔を開けるという進化を遂げたのかもしれない。

そう思うと、繭の底の小さな孔が、ウスタビガたちの苦勞と希望を語っているような気がします。